

例言

1. 本書は、道路築造に伴う菅谷堀之内遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 本遺跡は、群馬県高崎市菅谷町字堀之内 606 番 2、616 番 1、621 番、627 番 1、627 番 2、628 番 1 に所在している。
3. 本調査および整理作業は、ケイアイスター不動産株式会社・高崎市教育委員会・有限会社毛野考古学研究所による三者協定を締結し、高崎市教育委員会の指導・監理のもと、委託を受けた有限会社毛野考古学研究所が実施した。
4. 発掘調査および本書刊行に至る経費は、ケイアイスター不動産株式会社が負担した。
5. 発掘調査および報告書の作成は、高崎市教育委員会の指導・監理のもと土井道昭（有限会社毛野考古学研究所）が担当した。
6. 発掘調査における平面測量・空中写真撮影は小出拓磨（有限会社毛野考古学研究所）が担当した。
7. 発掘調査および整理作業は、平成 31 年 2 月 1 日～令和元年 9 月 30 日の期間で実施した。
8. 本遺跡は、高崎市教育委員会の遺跡番号で「757」である。
9. 本書の執筆については 1 を高崎市教育委員会、その他を土井が行った。
10. 本書に関わる資料は、一括して高崎市教育委員会が保管している。
11. 発掘調査および整理作業に携わった方々は以下のとおりである。
【発掘調査】 赤見公一 秋山文男 今井志郎 岡村美弥子 菊池暁 四ツ柳亘
【整理作業】 半澤利江 関小百合 武士久美子 竹中美保子
12. 発掘調査から報告書の刊行に至る過程で下記の機関・諸氏に御協力を賜った。記して感謝申し上げます。（順不同・敬称略）
ケイアイスター不動産株式会社 カネコハウス有限会社 伊藤明宏

凡例

1. 挿图中的の北方位は座標北、断面水準線数値は海拔標高を示す。座標値は世界測地系を用いている。
2. 遺構略称は、溝：S D、土坑：S K、ピット：P とした。
3. 遺構図および遺物実測図の縮尺については、各挿图中にスケールを付して表示している。また、遺物写真は遺物実測図とほぼ同縮尺である。
4. 遺物番号は、実測図・観察表・写真図版ともに共通である。
5. 遺物観察表に示した計測値の（ ）は復元推定値、[] は残存値を表す。
6. 本書ではテフラ（火山噴出物）の呼称として下記の略号を用いる。
A s - B : 浅間 B 軽石（天仁元年：1108 年） H r - F P : 榛名 - ニッ岳伊香保テフラ（6 世紀中葉）
A s - C : 浅間 C 軽石（3 世紀末葉） H r - F A : 榛名 - ニッ岳渋川テフラ（6 世紀初頭）
7. 遺構および土器の色調観察は『新版 標準土色帖』（農林水産技術会議事務局 財団法人日本色彩研究所監修 2006）を使用した。
8. 本書掲載の第 1 図は、高崎市発行 1/2,500『高崎市都市計画基本図』、第 2 図は国土交通省国土地理院発行 1/25,000『前橋』・『下室田』を一部改変引用した。

目次

例言 凡例 目次

I 調査に至る経緯	1	V 遺構と遺物	7
II 地理的・歴史的環境	2	1 概要	7
1 地理的環境	2	2 溝	7
2 歴史的環境	2	3 土坑	8
III 調査の方法と経過	4	4 窪地	9
1 調査の方法	4	5 ビット	9
2 調査の経過	4	6 遺構外出土遺物	9
IV 標準堆積土層	5	VI まとめ	14

報告書抄録

図版目次

第1図 調査区位置図	1	第5図 遺構実測図(1)	10
第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡	3	第6図 遺構実測図(2)	11
第3図 標準堆積土層	5	第7図 遺構実測図(3)	12
第4図 遺跡全体図	6	第8図 遺物実測図	13

表目次

第1表 ビット一覧表	9	第3表 SK-2出土遺物観察表	13
第2表 SD-1出土遺物観察表	13	第4表 遺構外出土遺物観察表	13

写真図版目次

PL. 1	調査区全景	SK-1 検出状態	
	SD-1 検出状態	SK-1 セクション	
	SD-1 Aセクション	SK-2 検出状態	
	SD-1 遺物出土状態	SK-3 検出状態	
	SD-1 Dセクション		
PL. 2	SD-2 検出状態	PL. 3	1号窪地 検出状態
	SD-2 Bセクション		1号窪地 セクション
	SD-2 Cセクション		標準堆積土層
	SD-3 Aセクション		作業風景
			出土遺物

II 地理的・歴史的環境

1 地理的環境

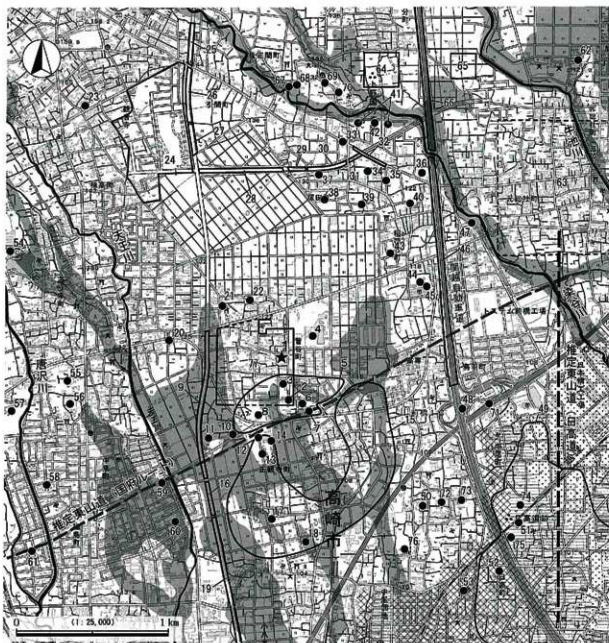
菅谷郷之内遺跡は、群馬県南西部の高崎市菅谷町字郷之内に所在する。高崎市は群馬県のほぼ中央に位置し、北西に榛名山、北に小野子山・子持山、北東に赤城山を望む。菅谷町は榛名山の火山活動による障壁岩屑なだれ（約 13,000 年前）に伴う堆積物により形成された相馬ヶ原扇状地上に立地している。この扇状地形は、標高 600 m 付近の扇頂部から南東方向へ緩傾斜しており、標高 110 m 付近の扇端部は前橋台地への地形変換点となっている。本遺跡の標高は現地表でおよそ 119 m を測り、相馬ヶ原扇状地の扇端部付近に位置している。周辺の地形をみると東側約 2.0 km には染谷川が南東流し、西側約 1.0 km には天王川が南流しており、本遺跡の周辺は天王川の開析によって自然堤防・後背湿地、埋没谷などが形成され、微高地と低地が複雑に入り組んだ地形となっている。遺跡周辺には、近代以前からとみられる畑地や用水路などの地割も少なからず残っているが、近年実施されている区画整理や宅地造成などによって市街化が進んでいる。

2 歴史的環境

ここでは、本遺跡から検出された遺構に関連する古墳時代～古代を中心に周辺遺跡を概観していく。

古墳時代に入り、元総社地域および扇端部以南の井野川下流域において、集落および水田耕作が本格的に営まれ始める。本遺跡南東の染谷川左岸に立地している新保遺跡、新保田中村前遺跡では、4 世紀前半代の住居跡が検出されている。さらに、西側の天王川と唐沢川に挟まれた台地上に立地する中泉十王堂遺跡（55）では 4 世紀後半代の住居跡が 5 軒検出されており、当該期の集落は下流域から上流域へ徐々に集落域を拡大していったことが窺える。生産域については、扇端部以南の低湿地に立地する日高遺跡（49）、日高中堀浜遺跡（52）、小八木 I 遺跡などが挙げられ、弥生時代後期以降から水田耕作が継続的に営まれている。5 世紀代に入ると、集落の増加傾向はさらに顕著となるが、その背景には三ツ寺 I 遺跡、北谷遺跡などの豪族居館に代表される首長層の存在が挙げられる。その要因として大規模な水田開発による生産基盤の安定化が指摘されている。しかし、6 世紀初頭や 6 世紀中葉に起こった榛名山二ツ岳による二度の噴火、それに伴う土石流などによって、生産基盤としていた水田・畠に多大な被害を受けたことが周辺の発掘調査により確認されている。これらの度重なる自然災害によって、首長層を中心とした集落域は生産基盤を失い衰退していく。

本遺跡の北東地域には、古代上野国の中核地とされている国府推定域、圓分僧寺・尼寺などが存在する。本遺跡南西側には古代八木郷と推定されている地域があり、井野川周辺の大八木屋敷遺跡では八脚門をもつ柵列と区画溝の内部に掘立柱建物群が検出され、「八木院」と想定されている。さらに、東側に隣接する融通寺遺跡では、瓦、瓦塔、銅鏡、緑釉陶器唾壺、熊野堂遺跡では金銅製の装飾金具がそれぞれ出土し、当該地域に「古代寺院」が存在した可能性が指摘されている。さらに、本遺跡西側の小八木志志貝戸遺跡（19）では、100 m 四方以上の方形区画内に掘立柱建物群が整然と配置された居宅が検出されており、律令期に伴う主要施設は元総社地域を中心に当該地域まで及んでいたようである。また、周辺遺跡の集落を扇端時期別に概観すると、8 世紀代が少なく 9 世紀代～10 世紀代が多いことから、集落形成の在り方に律令体制の盛衰が大きく影響していることが窺える。一方、生産域については、先述した古墳時代と同様に扇端部以南の低湿地を中心に水田耕作が営まれており、菅谷石塚遺跡（9）、正観寺遺跡群（15）、正観寺西原遺跡（16）、小八木志志貝戸遺跡からは多数の水田跡が検出されている。これらの水田跡は 1108 年（天仁元年）に起こった浅間山の噴火によって As-B 軽石が降下するまで継続的に生産活動が行われていたことがわかっている。



相馬ヶ原原状地
 相馬ヶ原原状地内の谷底平野
 河成段丘（後背湿地：完新世）

前橋台地の微高地
 前橋台地上の後背湿地

- | | | | | |
|--------------|----------------|------------------------|-----------------|------------------------|
| 1. 菅谷堀之内遺跡 | 17. 正親寺赤野遺跡 | 33. 引間松雲遺跡 | 48. 中尾遺跡 | 64. 四分前寺跡 |
| 2. 菅谷高畑遺跡 1 | 18. 正親寺八木坑遺跡 | 34. 塚田村東田遺跡 | 49. 日血遺跡 | 65. 園分田寺跡 |
| 3. 菅谷高畑遺跡 2 | 19. 小八木志志貝戸遺跡 | 35. 塚田村東田IV遺跡 | 50. 中尾所之免遺跡 | 66. 上野園分寺・
尼寺中間地城遺跡 |
| 4. 菅谷村東遺跡 | 20. 榑高家赤三高所遺跡 | 36. 塚田村東遺跡 | 51. 上日高町山谷戸遺跡 | 67. 飯塚岡元屋敷遺跡 |
| 5. 菅谷遺跡群 | 21. 菅谷中原遺跡 | 37. 塚田の埴遺跡 | 52. 日高小塚沼遺跡 | 68. 引間古床敷 |
| 6. 菅谷高貝戸遺跡 1 | 22. 菅谷万年貝戸遺跡 | 38. 塚田村前II遺跡 | 53. 中尾村前遺跡 | 69. 後元間遺跡 |
| 7. 高貝戸遺跡 | 23. 榑高平石遺跡 | 39. 塚田村前遺跡 | 54. 堤上遺跡 | 70. 引間妙見遺跡 |
| 8. 菅谷村南遺跡 | 24. 榑高跡跡群 | 40. 塚田村東II・
榑高台村北遺跡 | 55. 中泉十平空遺跡 | 71. 金尾城 |
| 9. 菅谷石塚遺跡 | 25. 諏訪西遺跡 | 41. 園分寺参道遺跡 | 56. ミツキ・七郎遺跡 | 72. 黒崎原敷 |
| 10. 菅谷石塚II遺跡 | 26. 小池遺跡 | 42. 天鏡社西川遺跡 | 57. 中尾遺跡 | 73. 中尾城 |
| 11. 菅谷遺跡 | 27. 西三社免遺跡 | 43. 榑高台村南遺跡 | 58. 榑垣原遺跡 | 74. 中尾村東館址 |
| 12. 菅谷古墳群 | 28. 榑高山久藤遺跡 | 44. 榑高台北金尾遺跡 2 | 59. 榑島原地遺跡 | 75. 上日高屋敷 |
| 13. 正親寺遺跡群O区 | 29. 引間六石遺跡 | 45. 榑高台北金尾遺跡 | 60. 証口遺跡・達口古墳群 | 76. 小八木新井屋敷 |
| 14. 正親寺集勝遺跡 | 30. 引間松雲遺跡III区 | 46. 鳥羽遺跡 | 61. 西野南遺跡 | 77. 菅谷城 |
| 15. 正親寺遺跡群 | 31. 塚田中原遺跡 | 47. 赤野遺跡 | 62. 榑社甲船荷塚大道西遺跡 | |
| 16. 正親寺西原遺跡 | 32. 塚田中原遺跡O区 | | 63. 上野国府定域 | |

第2図 遺跡の位置と周辺の道跡

III 調査の方法と経過

1 調査の方法

委託調査箇所は、戸建住宅建設に伴う道路築造予定地で調査対象面積は約 88.37㎡である。高崎市教育委員会による試掘調査結果に基づき、遺構確認面は Hr-FA 層直下の As-C 軽石混黒色土層の上面としている。表土掘削は重機によって Hr-FA 層をある程度取り除いた後、人力にて遺構確認、遺構掘削、記録作業などを行った。なお、遺構確認面としている As-C 軽石混黒色土層が旧地表面であることから、Hr-FA 層の除去作業はジョレンや移植ゴテを併用して行った。遺構掘削に際しては、土層観察用のベルトを設定し埋没状態を確認した。検出された遺構の記録は、平面・断面測量（縮尺 1/20）、写真撮影で対応した。平面測量はトータルステーションを使用し、断面測量は一部を除き手実測で記録した。写真記録は 35mmモノクロ・35mmカラーリバーサル、デジタルカメラ（撮像素子 APS-C サイズ）の 3 種類を使用し、遺跡全景空中写真については、ドローン（Dji Phantom3）を用いて撮影した。

2 調査の経過

現地調査は、平成 31 年 2 月 1 日から平成 31 年 2 月 13 日まで行い、整理作業・報告書作成は平成 31 年 2 月 14 日～令和元年 9 月 30 日までの期間に行った。経過概要は下記のとおりである。

【発掘調査】

- 2月1日：発掘現場の状況確認および駐車場予定地の除草作業を行った。簡易トイレを1台設置した。
- 2月4日：0.15バックホーを搬入し、調査区北側から表土掘削を開始した。高崎市教育委員会立ち会いのもと、調査範囲および重機による掘削深度を確認した。発掘補助員を動員し、調査区の周囲に杭・トラロープによる安全対策を行った。
- 2月5日：0.15バックホーによる表土掘削が終了した。残土の整形後、重機の搬出作業を行った。調査区北側から壁面精査および遺構確認作業を開始し、溝・土坑・ピットなどのプランが確認された。GPS測定器を用いて基準点測量を行った。
- 2月6日：確認された溝・土坑・ピット・窪地の遺構調査を開始した。写真・測量などの記録作業は、遺構調査の進捗に伴い適宜実施した。
- 2月7日：検出された溝・土坑・ピット・窪地の調査を終了した。調査区南東壁際にトレンチ掘削を行い標準堆積土層を確認した。高崎市教育委員会による調査完了検査を実施した。
- 2月8日：調査区内の清掃作業を行い、各遺構の全景写真撮影および遺跡全景写真（地上）を行った。光波測量器による平面測量を行った。強風によりドローンによる写真撮影は延期とした。
- 2月13日：調査区内の清掃作業後、ドローンによる遺跡全景空中写真撮影を行った。発掘器材、簡易トイレの撤去を行い、現地における発掘調査の全行程を終了した。なお、安全対策については開発者と協議を行った結果、開発工事が始まる3月上旬まで現状のまま設置しておくこととした。

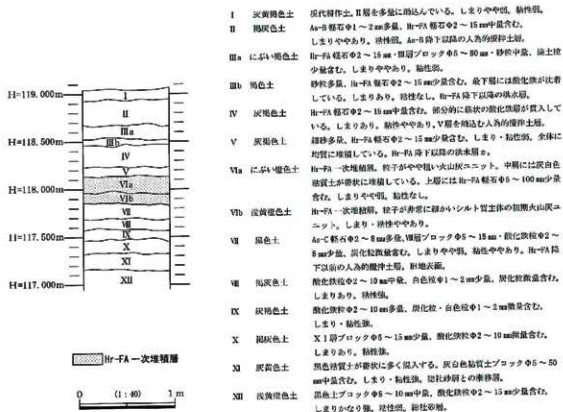
【整理作業・報告書作成】

- | | |
|-----------------------------|---------------------|
| 3月期：遺物の洗浄・注記作業。写真アルバム作成。 | 7月期：原稿執筆。報告書の編集作業。 |
| 4月期：遺構図面の修正・2次原図作成。 | 8月期：入稿・校正。 |
| 5月期：遺物の抽出・写真撮影・実測・デジタルトレース。 | 9月期：印刷・製本。報告書刊行・納品。 |
| 6月期：各挿図・図版作成。 | |

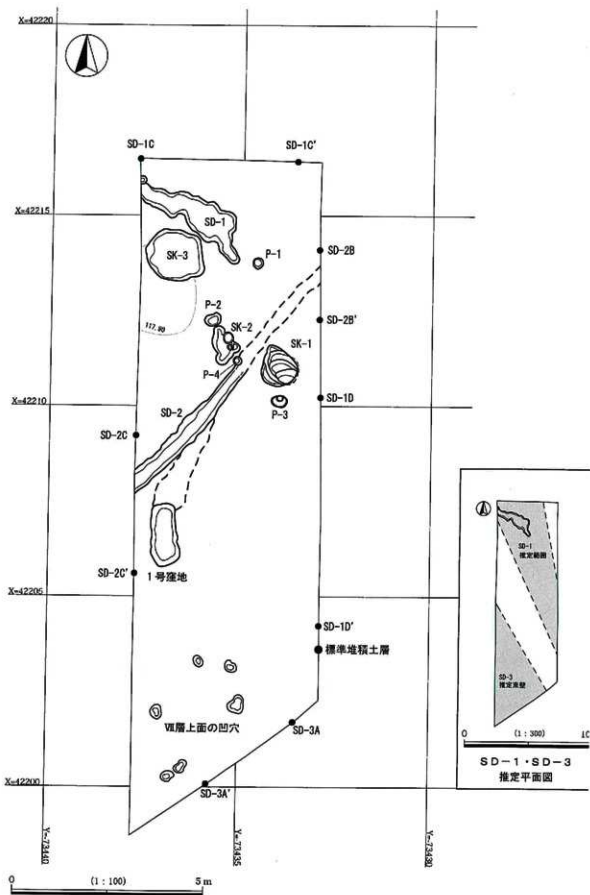
IV 標準堆積土層

本遺跡の標準堆積土層は、調査区南東壁際にトレンチ掘削を行い把握した。I層は現代耕作土であり、畑地として利用されていたようである。II層はAs-B軽石を多く混入しており、旧耕作土とみられる。人為的な攪拌は12世紀初頭以降に行われたものと考えられるが、同層からの出土遺物はなく明確な時期は不明である。なお、同層の下層にはAs-B軽石の一次堆積層は遺存していないかった。III層は砂粒・小礫が主体であることから洪水層と考えられ、調査区内では部分的に堆積しているのみである。IV層はHr-FAや白色軽石(Hr-FAに伴う火山軽石)を混入する土層である。As-B軽石が混入していないことや、V層に比べて均質ではないことから古代の攪拌土層と推測される。V層は比較的均質な細粒砂質土を主体としている。混入物にはHr-FA火山灰が認められるが、洪水起源による2次堆積層である可能性が考えられる。VI層はHr-FA一次堆積層である。同層は複数層に細分可能であるが、色調や粒径の違いなどから2層に大別し、やや粒子の粗い上層をVIa層、粒子が非常に細かい下層をVIb層としている。VII層はAs-C軽石を多く混入する黒色土層で、3世紀末葉以降～6世紀初頭以前の人為攪拌土層と考えられる。なお、VII層下位においてAs-C軽石一次堆積は確認されていない。VIII～X層は粘質土であり、全体に湿潤である。XI層は総社砂層と粘質土層との漸移層である。XII層は非常に緊密な総社砂層である。なお、トレンチ掘削時には、各層毎に平面精査を行い遺構および遺物の把握に努めたが、いずれも検出されなかった。

遺構確認面はHr-FA一次堆積層直下のVII層上面とし、古墳時代～近世の遺構を調査対象としている。現地表面から遺構確認面までの掘削深度はおおよそ1.2m～1.4mである。



第3図 標準堆積土層



第4図 遺跡全体図

V 遺構と遺物

1 概要

今回の調査では、基本層序第Ⅶ層上面において溝跡3条、土坑3基、ピット4基、窪地1箇所が検出された。これらの遺構の時期は、Hr-FA 降下以前および降下以後の2時期に大別され、SD-2と1号窪地以外の遺構については6世紀初頭以降に帰属するものである。なお、SD-3は調査区壁にて遺構埋没土が確認されたものであり、平面プランに関してはⅢ層～Ⅵb層中に存在していたものと想定される。

遺物は縄文土器、土師器(坏)、須恵器(坏・表)などが少量出土している。しかし、遺構に伴うものは少なく、須恵器表片が溝(SD-1)、土坑(SK-2)から出土しているのみである。

2 溝

SD-1 (遺構：第5図、PL.1 / 遺物：第8図、第2表、PL.3)

位置：X = 42,210 ~ 42,220、Y = -73,435 ~ -73,440 グリッド。重複：なし。形態：北西から南東方向に走行する。北西端は調査区外へ延び、南東端は規模を縮小しながら緩やかに立ち上がる。調査区内において明確な掘り込みとして長さ約3.31mが遺存している。底面の標高は北西端が約117.869m、南東端部が約117.817mであり、南東側がおおよそ5cm低い状態にある。規模：Ⅶ層上面から検出された本溝の規模は、上端幅0.3m ~ 1.04m、下端幅0.17m ~ 0.82m、深さ11.6cmを測り、調査区壁面における規模は、上端幅約2.5m ~ 4.3m、下端幅0.7m ~ 0.75m、深さ77cm ~ 91cmを測る。主軸方位：N - 32° - W。底面の状態：全体に凹凸が顕著であり、部分的に小ピット状の凹穴が認められる。遺構埋没状態：底面～下層は水性堆積とみられるシルト質土・砂質土が多量に埋没しており、中～上層はⅣ・Ⅴ層に近似する褐灰～灰黄褐色土が自然埋没している。出土遺物：土師器、須恵器坏・表などの小片が出土した。掲載遺物は1点。時期：埋没状態や出土遺物などから奈良・平安時代と想定される。備考：本溝の性格については、埋没状態や走行方向などから古代の用水路である可能性が考えられる。なお、遺構確認面において検出された本溝プランは底面付近のみが遺存していたに過ぎず、調査区壁面の観察では規模が大きくなることが確認されている。

SD-2 (遺構：第6図、PL.2)

位置：X = 42,210 ~ 42,215、Y = -73,435 ~ -73,440 グリッド。重複：SD-3・P-4より古い。1号窪地とは同時期と判断される。形態：北東から南西に向けて直線的に走向しており、両端部はいずれも調査区外へ延びる。調査区内において長さ約7.2mの範囲を調査しており、底面の標高は北東端が約117.817m、南西端が約117.774mであり、南西側がおおよそ4cm低い状態にある。規模：上端幅0.43m ~ 0.58m、下端幅0.24m ~ 0.27m、深さおおよそ10cm。主軸方位：N - 41° - E。底面の状態：皿状を呈する。凹凸はみられず概ね平坦である。遺構埋没状態：上～下層にかけてHr-FA一次堆積層(Ⅵb層)により埋没し、底面付近はAs-C軽石をほとんど含まない黒色土が自然埋没している。出土遺物：出土しなかった。時期：埋没状態から3世紀末葉～6世紀初頭と想定される。備考：本溝の埋没状態からは、常態的な流水を示すような砂粒・シルトは認められておらず、用水路として機能していたのかは不明である。しかし、底面にはノロ状の黒色土が堆積していることから、最終埋没時には何らかの流水あるいは滞水があったものと推測される。なお、本溝は底面までの残存深度が浅いことから、Ⅵ層下位の地形変化による痕跡の可能性も考慮されたため、調査区南西壁・北東壁面を載ち割り堆積状態を観察したが、Ⅵ層の地形変化は認められなかった。

SD-3 (遺構:第6図、PL.2)

位置: X = 42,200 ~ 42,210, Y = -73,435 ~ -73,440 グリッド。重複: SD-2、1号窪地より新しい。
形態: 調査区西・南壁面の断面観察から、北西から南東方向に走向していると推測される。規模: 上端幅 5.2 m 以上、下端幅 4.3 m、深さ 47 ~ 79 cm。主軸方位: N - 25° - W。底面の状態: 調査区南壁面の観察では、中央付近に比べて壁面周辺が 1 段低い状態である。遺構埋没状態: 中～下層は水性堆積とみられる砂粒・小礫が大量に埋没しており、壁際は流水の影響により地山の一部が抉り取られている。上層はⅡ・Ⅲ層を主体とする褐灰～灰黄褐色土が自然埋没している。出土遺物: 出土しなかった。時期: 出土遺物がなく詳細な時期については不明であるが、上層の埋没土中には As-B 軽石が混入していることから、最終埋没は 12 世紀初頭以降と判断される。備考: 性格については、中～下層に堆積している砂・礫層などから、北西から南東へ配水するための用水路として機能していた可能性が考えられる。なお、上層の埋没状態を考慮すると、中世以降には用水路として機能していなかったものと推測される。ところで、本遺跡南西に位置する菅谷石塚遺跡の 2 区からは、As-B 軽石下水田の下面から 9 世紀代の洪水層により埋没した水田跡が検出されている。本溝の砂・礫層に関しても層位的には Hr-FA 層より新しく、As-B 軽石混土層より古いことから菅谷石塚遺跡の 2 区から検出された 9 世紀代の洪水層とは層位的な年代は矛盾していない。しかし、両遺跡から検出された洪水層が同一起源であるのかについては明確にすることができなかった。

3 土坑

SK-1 (遺構:第7図、PL.2)

位置: X = 42,215, Y = -73,435 グリッド。規模: 長軸 1.09 m、短軸 0.93 m、深さ 43 cm。形状等: 平面・断面形態はいずれも不整形である。東壁面はオーバーハングしており、西壁面はテラス状の段を有している。底面の状態: 凹凸は認められない。東側が一段深く掘り込まれ、西側ほど浅い傾向がみられる。遺構埋没状態: 下層には小礫、中層は砂粒、上層はシルトを主体とする砂礫層が自然埋没している。出土遺物: 出土しなかった。時期: 埋没状態から 6 世紀初頭～12 世紀初頭と推測される。備考: 検出された地点が SD-1 の想定範囲内であることや埋没状態などから、両溝との関連性が窺われる。

SK-2 (遺構:第7図、PL.2 / 遺物:第8図、第3表、PL.3)

位置: X = 42,215, Y = -73,440 グリッド。規模: 長軸 1.02 m、短軸 0.7 m、深さ 20 cm。形状等: 平面・断面形態はいずれも不整形である。底面の状態: 底面東側には小ビット 2 基が認められる。遺構埋没状態: 全体に砂粒・シルトなどの水性堆積層を主体としており、部分的に Hr-FA 軽石が混入している。出土遺物: 埋没土中から土師器、須恵器製の破片が少量出土している。掲載資料は 1 点。時期: 出土遺物から奈良・平安時代と想定される。備考: SD-1 から出土した須恵器製と本遺構出土の須恵器製に接合関係が認められることから、同時期に機能していた可能性が高いと思われる。さらに、平面形態が不整形であることや、埋没状態が水性堆積を示していることなどから、本遺構は SD-1 の底面が部分的に落ち込んだ痕跡である可能性が考えられる。

SK-3 (遺構:第7図、PL.2)

位置: X = 42,215, Y = -73,440 グリッド。規模: 長軸 1.45 m、短軸 1.34 m、深さ約 14 cm。形状等:

平面形態は不整形、断面形態は皿状を呈する。底面の状態：全体に凹凸が認められる。遺構埋没状態：砂粒、VI a・V層ブロックを主体とする灰黄褐色土が人為埋没している。出土遺物：出土しなかった。時期：埋没状態から6世紀初頭～12世紀初頭と推測される。

4 窪地

1号窪地（遺構：第7図、P.L.3）

位置：X = 42,210、Y = -73,440 グリッド。重複：プラン北東端部はSD-2と重複しているが、同時期と考えられる。形態：SD-2の南西側から南方向に屈曲しながら約3.4m延び、南端部は隅丸方形状を呈している。規模：上端幅0.2～0.24m、下端幅0.13～0.16m、深さ約4cm。主軸方位：N-8°-W、N-24°-E。底面の状態：僅かに浅く窪んでいる。凹凸はみられず概ね平坦である。遺構埋没状態：Hr-FA一次堆積層（VI b層）による埋没。出土遺物：出土しなかった。時期：埋没状態から3世紀末葉～6世紀初頭と想定される。備考：遺構の性格については不明であるが、SD-2の北東側から何らかの要因により流水がオーバーフローしたことによる痕跡と考えられようか。

5 ピット

ピット（遺構：第7図／第1表）

本遺跡からは4基のピットが検出されている。P-1・2・4は残存深度が浅く、P-3は柱痕とみられる一段深い掘り方を有している。各ピットからの出土遺物はなく詳細な帰属時期は不明であるが、埋没状態からHr-FA降下後～As-B軽石降下以前に帰属するものと考えられる。

各ピットの計測値は、第1表に記載した。

第1表 ピット一覧表

遺構名	位置	平面形状	規模 (cm)			埋没状態	時期	備考
			長軸	短軸	残存深度			
P-1	X = 42,215、Y = -73,435 グリッド	円形	28	26	15	自然埋没	6世紀初頭～12世紀初頭	
P-2	X = 42,215、Y = -73,440 グリッド	楕円形	41	30	9	自然埋没	6世紀初頭～12世紀初頭	
P-3	X = 42,215、Y = -73,435 グリッド	楕円形	41	30	30	自然埋没	6世紀初頭～12世紀初頭	柱痕有り
P-4	X = 42,215、Y = -73,440 グリッド	円形	22	20	15	自然埋没	6世紀初頭～12世紀初頭	SD-2より新しい

6 遺構外出土遺物（遺物：第8図、第4表、P.L.3）

ここでは、遺物の時期と出土層位の年代が異なる遺物2点を掲載した。1は縄文時代後期の深鉢小片であり、SD-2の載ち割りトレンチを掘削した際に基本層序第VII層中から出土したものである。なお、同トレンチ内には遺構らしき痕跡は認められておらず、3世紀末葉以降に混入したものであると思われる。2は古墳時代中期の土師器環である。調査区南側のSD-3（推定範囲内）周辺を重機で掘削していた際に出土したものである。SD-3の洪水砂層あるいはHr-FA層中～VII層直上に混入していた可能性が考えられるものの、明確な出土層位を捉えることができなかつたため、遺構外出土遺物としている。

溝 SD-1

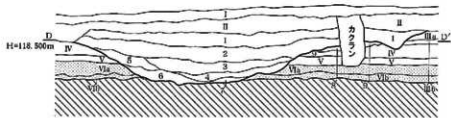
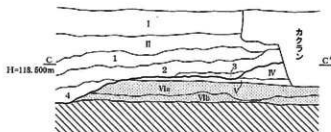
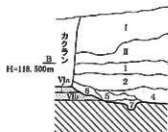


SD-1 土層説明 (A-A')

- 1 褐色土 砂粒・H-Fa 軽石φ5～10mm中量、Ⅳ層ブロックφ5～30mm少量、腐植少量含む。しまり強。粘性やや弱。
- 2 褐色土 砂粒大量、H-Fa 軽石φ1～3mm・灰色土ブロックφ5～15mm少量含む。しまり強。粘性なし。

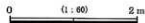
SD-1 土層説明 (B-B' C-C' 共通)

- 1 褐色土 H-Fa 軽石φ2～15mm多量、Ⅳ層ブロックφ5～15mm少量。炭化腐植少量含む。しまり強。粘性弱。
- 2 灰褐色土 H-Fa 軽石φ2～15mm多量、Ⅳ層ブロックφ5～30mm少量。炭化腐植少量含む。しまり強。粘性やや弱。
- 3 にぶい黄褐色土 H-Fa 軽石φ2～10mm中量、Ⅳ層ブロックφ5～20mm少量含む。しまり強。粘性弱。
- 4 黄灰色土 細砂粒・砂粒多量、H-Fa 軽石φ2～15mm中量。褐色土上ブロックφ10～100mm少量含む。しまりあり。粘性なし。
- 5 褐色土 H-Fa 軽石φ2～5mm・細砂粒少量含む。しまり・粘性あり。
- 6 褐色土 H-Fa 軽石φ2～10mm中量、Ⅴ層ブロックφ10～20mm・砂粒少量含む。しまり強。粘性やや弱。
- 7 褐色土 細砂粒多量、H-Fa 軽石φ2～8mm中量、Ⅴ層ブロックφ2～5mm・細砂粒少量含む。しまり弱。粘性なし。



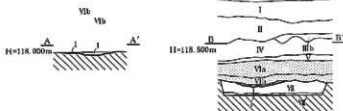
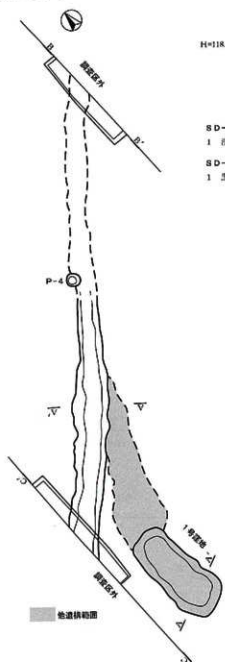
SD-1 土層説明 (D-D')

- 1 褐色土 H-Fa 軽石φ2～15mm中量。炭化腐植少量含む。しまりあり。粘性ややあり。
- 2 灰褐色土 炭化腐・H-Fa 軽石φ2～15mm少量、腐植2～5mm微量含む。しまりあり。粘性ややあり。
- 3 灰褐色土 H-Fa 軽石φ2～15mm・砂粒・Ⅳ・Ⅴ層ブロックφ10～50mm少量含む。しまり・粘性ややあり。
- 4 にぶい褐色土 炭化腐・H-Fa 軽石φ2～8mm・砂粒少量。粘土粒少量含む。しまりややあり。粘性やや弱。
- 5 褐色土 細砂粒中量。H-Fa 軽石φ5～10mm少量含む。しまりややあり。粘性やや弱。
- 6 褐色土 細砂粒多量。炭化腐・H-Fa 軽石φ5～20mm・砂粒・灰色シルト少量含む。しまりやや弱。粘性弱。
- 7 褐色土 細砂粒中量。砂粒・Ⅴ層ブロックφ5～10mm少量含む。しまりやや弱。粘性弱。
- 8 灰白色土 H-Fa 軽石φ2～15mm・砂粒・灰色シルトブロックφ40～60mm少量含む。しまりやや弱。粘性弱。本溝より宮城県沖の淡水層。
- 9 灰褐色土 細砂粒多量。H-Fa 軽石φ2～10mm少量含む。しまり弱。粘性なし。全体に鉄分沈着が顕著。本溝より宮城県沖の淡水層。



第5図 遺構実測図(1)

溝 SD-2

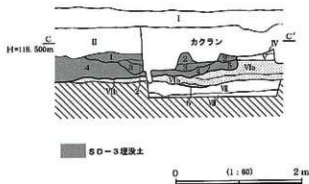


SD-2 土層説明 (A-A')

1 灰黄褐色土 II-Fa 一次堆積物、粘土が非常に細かい粗面大山炭ユニット、しまり・粘性ややあり。

SD-2 土層説明 (B-B')

1 黒色土 褐色土ブロックΦ5～20mm少量、Ar-C 軽石Φ2～5mm少量含む、しまりややあり、粘性あり。

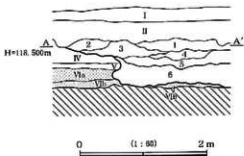


SD-3埋没土

SD-2 土層説明 (C-C')

- 1 灰褐色土 砂粒多量、II-Fa 軽石Φ2～5mm・軽石Φ2～10mm少量含む、しまり弱、粘性なし、SD-3埋没土。
- 2 灰黄褐色土 細砂粒・灰色シルトブロックΦ5～15mm少量、II-Fa 軽石Φ2～5mm少量含む、しまりやや弱、粘性あり、SD-3埋没土。
- 3 褐色土 II-Fa 軽石Φ2～10mm・細砂粒・灰色シルトブロックΦ5～15mm少量含む、しまり・粘性弱、SD-3埋没土。
- 4 褐色土 砂粒・細砂粒・軽石Φ5～30mm多量、II-Fa 軽石Φ2～20mm少量含む、しまり弱、粘性なし、全体に鉄分沈着が顕著、SD-3埋没土。
- 5 浅黄褐色土 砂粒多量、V-VIa 軽石ブロックΦ5～30mm中量、軽石Φ2～10mm少量含む、しまりややあり、粘性弱、SD-3埋没土。
- 6 黒色土 褐色土ブロックΦ5～20mm少量、Ar-C 軽石Φ2～5mm少量含む、しまりややあり、粘性あり、SD-2埋没土。

溝 SD-3



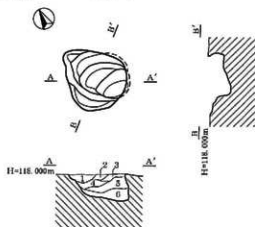
SD-3 土層説明 (A-A')

- 1 灰黄褐色土 Ar-B 軽石Φ1～2mm中量、II-Fa 軽石Φ2～5mm少量、炭化粒微量含む、しまりややあり、粘性やや弱。
- 2 褐色土 細砂粒多量、Ar-B 軽石Φ1～2mm 灰褐色土ブロックΦ5～10mm少量含む、しまり・粘性弱。
- 3 灰黄褐色土 II-Fa 軽石Φ2～10mm・IV層ブロックΦ5～30mm・砂粒少量含む、しまりやや弱、粘性弱。
- 4 褐色土 砂粒多量、Ar-B 軽石Φ1～2mm・II-Fa 軽石Φ2～15mm少量、炭化粒・軽石Φ2～5mm少量含む、しまり・粘性やや弱。
- 5 褐色土 Ar-B 軽石Φ1～2mm・II-Fa 軽石Φ2～5mm・砂粒少量、炭化粒微量含む、しまりやや弱、粘性ややあり。
- 6 褐色土 砂粒・細砂粒・軽石Φ5～30mm多量、II-Fa 軽石Φ2～20mm少量含む、しまり弱、粘性なし、全体に鉄分沈着が顕著。

第6図 遺構実測図(2)

土坑

SK-1



SK-1 土層説明 (A-A')

- 1 黒灰色土 灰色細砂粒多量、炭化粒・Hr-FA 軽石Φ2~6mm・2層ブロックΦ5~30mm少量含む。しまり弱、粘性あり。
- 2 黄褐色土 黄色細砂粒多量、Hr-FA 軽石Φ2~6mm少量含む。しまりややあり、粘性なし。
- 3 にぶい黄褐色土 砂粒多量、黄色細砂粒中量含む。しまり弱、粘性なし。
- 4 灰白色土 砂粒多量、灰色細砂粒中量、Hr-FA 軽石Φ2~10mm少量含む。しまりやや弱、粘性弱。
- 5 明黄褐色土 黄色細砂粒大量、Hr-FA 軽石Φ2~5mm・埋戻ブロックΦ5~10mm少量含む。しまり弱、粘性なし。
- 6 黒灰色土 粗Φ5~30mm大量、砂粒多量含む。しまり・粘性なし。

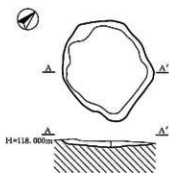
SK-2



SK-2 土層説明 (A-A')

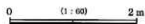
- 1 にぶい褐色土 砂粒・黄色細砂粒多量、灰色シルト層状に中量、炭化粒・Hr-FA 軽石Φ2~10mm少量含む。しまりやや弱、粘性弱。
- 2 黒灰色土 砂粒・粗Φ2~9mm中量、Hr-FA 軽石Φ10~70mm少量含む。しまりあり、粘性ややあり。

SK-3



SK-3 土層説明 (A-A')

- 1 灰黄褐色土 砂粒多量、Vb 埋ブロックΦ20~50mm・埋戻ブロックΦ20~30mm中量、Hr-FA 軽石Φ2~30mm少量含む。しまり強、粘性弱、砂粒には粘土成分が顕著。

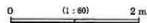


窪地 1号窪地



1号窪地 土層説明 (A-A')

- 1 淡黄褐色土 Hr-FA 次体粗砂。粒子が非常に細かい。埋戻火山灰のニット。しまり・粘性ややあり。



ピット



P-1 土層説明 (A-A')

- 1 黒灰色土 黄色細砂粒多量、Hr-FA 軽石Φ2~6mm、灰色細砂粒少量含む。しまりやや弱、粘性弱。



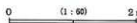
P-2 土層説明 (A-A')

- 1 黒灰色土 砂粒・粗Φ5~20mm多量、Vb 埋ブロックΦ5mm少量含む。しまり弱、粘性なし。



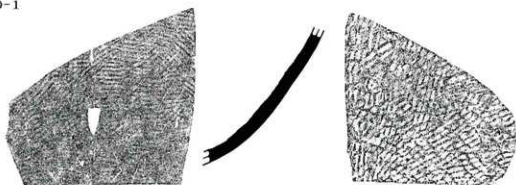
P-3 土層説明 (A-A')

- 1 黒灰色土 砂粒多量、黄色細砂粒・埋Φ1~10mm中量、Vb 埋ブロックΦ5~20mm少量含む。しまり弱、粘性なし。



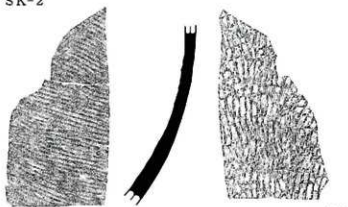
第7図 遺構実測図(3)

SD-1



1 (1/3)

SK-2



1 (1/3)

遺構外



1 (1/3)



2 (1/3)

0 10cm 1:3

第8図 遺物実測図

第2表 SD-1出土遺物観察表

遺物名	器種	法量	①組成②色澤③胎土④残存	成・整形技法の特徴	注記・備考
1	須臾器 甕	口径：— 底径：— 器高：—	①灰褐色②灰褐色③胎土④残存 ⑤白色粒・黒色粒 ⑥厚肌片	外面：平行押き。 内面：当て共焼。	SD-1 No. 1, No. 2 須臾器A

第3表 SK-2出土遺物観察表

遺物名	器種	法量	①組成②色澤③胎土④残存	成・整形技法の特徴	注記・備考
1	須臾器 甕	口径：— 底径：— 器高：—	①灰褐色②灰褐色③胎土④残存 ⑤白色粒・黒色粒・石英 ⑥厚肌片	外面：平行押き。 内面：当て共焼。	SK-2 甕土, SD-1 甕土 SD-1 甕土の須臾器状と接合 面出産A

第4表 遺構外出土遺物観察表

遺物名	器種	法量	①組成②色澤③胎土④残存	成・整形技法の特徴	注記・備考
1	横文土器 深鉢	口径：— 底径：— 器高：—	①灰褐色②灰褐色③胎土④残存 ⑤白色粒・黒色粒・石英 ⑥厚肌片	口縁部文器体に横筋状線および鉛筆線が施文される。 内外面：刷ナデ。	SD-2C セクシヨン 須臾器中 須臾器之内器式 内照する口縁部が欠損
2	土師器 坪	口径：(13.8) 底径：— 器高：8.7	①灰褐色②赤褐色③胎土④残存 ⑤白色粒・赤褐色粒・透明粒 ⑥厚肌片	外面：口縁部刷ナデ、体部一透部へう雨り後体部上半ナデ。 内面：口縁部刷ナデ後(体部)体部上半刷ナデの暗文。 体部下半一透部ナデ。	須臾器一透

VI まとめ

ここでは、6世紀初頭に噴出した Hr-FA 火山灰に被覆されていた As-C 軽石混黒色土層（基本層序第VII層）について、本文中で記せなかった内容の補足を先行本書のまとめとしたい。

本遺跡の遺構確認作業は、Hr-FA 一次堆積層（基本層序第VI a層・VI b層）を取り除き、6世紀初頭の地表面であるVII層上面を検出すると並行して、6世紀初頭より新しい時期に帰属する遺構の有無を確認している。それにより検出された遺構（SD-1・3、SK-1～3、P-1～4）の範囲外において、Hr-FA が降下する直前の旧地表面を捉えることができた。以下では、その旧地表面についての概要を記していく。

VII層の表面を概観すると、高低差5cmほどの凸凹とした起伏が全体的に認められており、調査区南側ではその傾向が顕著である。この起伏が何に起因する痕跡であるのか明確ではないが、ヒト・動物の足跡および工具痕などの痕跡ではなかった。また、調査区内での高低差を比較すると、北西端の標高は約117.92m、南東端の標高は約117.85mを測り、北西側から南東側へ向かって7cmほど傾斜していることがわかる。この傾斜方向の要因については、旧地形である相馬ヶ原扇状地が影響しているものと考えられる。

VII層中に含まれる混入物には、多量のAs-C軽石が認められることから3世紀末葉以降～6世紀初頭以前に人為的な攪拌が行われていたものと考えられる。しかし、調査区内からは畦畔や畝などの痕跡が認められておらず、攪拌行為が生産遺構（水田・畝）に伴うものかは不明である。ただし、VI b層直下から検出された溝跡（SD-2）の存在から、何らかの目的をもって攪拌が行われたものと推測される。さらに、混入しているAs-C軽石の状態に着目すると、各軽石の粒径は2～8mmと不均一で表面には角が残り、全体に白色を帯びさほど汚れていない状態であった。周辺遺跡の調査事例などからAs-C軽石が攪拌された頻度を推察すると、本遺跡に関しては攪拌行為が短期間であった可能性が高いと思われる。

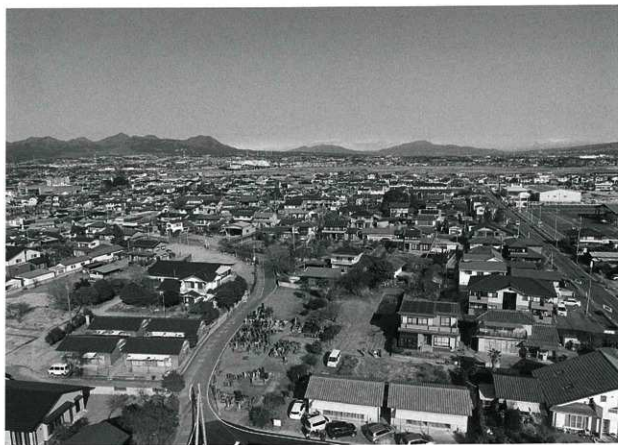
ところで、本遺跡周辺での生産遺跡を概観すると、扇端部以南に立地している日高遺跡・日高中堀添遺跡・中尾村前遺跡では弥生時代後期～平安時代の水田跡が検出されており、当該期と考えられるHr-FA直下からは小区画水田跡が良好な状態でみつまっている。これらの遺跡から検出された水田跡は、周辺地域における初期段階の生産域と考えられており、相馬ヶ原扇状地扇端部と前橋台地が交錯する地形変換点以南の低湿地を優先的に選地していたことが窺える。これは、本遺跡周辺が生産域としては積極的に利用されていなかったことを示すものであり、上述した攪拌行為が短期間であった要因とも考えられよう。

今回の調査によって3世紀末葉以降～6世紀初頭以前における人為攪拌の痕跡を確認することができた。しかしながら、攪拌土が水田耕作に起因するものか否かに関しては、プラントオパール分析を実施していないため明確にすることができなかった。これまで、本遺跡近隣の発掘調査では、Hr-FA一次堆積層の遺存状態が一様ではなく、Hr-FA火山灰に被覆された遺構検出が少ない状況にある。そのため、同火山灰に被覆された旧地形の広がりや土地利用の在り方を捉えるために、自然科学分析も視野に入れた調査が必要であったのではなからうか。結果的に調査段階における課題を露呈することになってしまったが、本書が今後継続するであろう本遺跡周辺での埋蔵文化財発掘調査の一助となれば幸いである。

【主な引用・参考文献】

- 宮崎市史編さん委員会 1996『新編高崎市史 資料編2 原始古代Ⅱ』高崎市
- 神谷佳明・橋崎修一郎 2003『菅谷石塚遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 宮田忠洋・吉田有里 2011『菅谷・村東遺跡』高崎市教育委員会
- 日沖朝史 2016『群馬県前橋市元蔵社地域における地形の形成と土地利用』『地域考古学1号』地域考古学研究会
- 日沖朝史 2016『中泉十王堂遺跡』高崎市教育委員会
- 春里桃子・宮本久子 2019『菅谷高塚遺跡2』高崎市教育委員会

写真図版



調査区遠景（左に榛名山、中央に子持山・小野子山を望む）



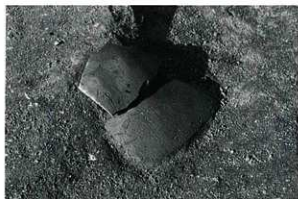
調査区全景 (上が東)



SD-1 検出状態 東から



SD-1 Aセクション 南東から



SD-1 遺物出土状態 東から



SD-1 Dセクション 西から



SD-2 検出状態 北東から



SD-2 Bセクション 西から



SD-2 Cセクション 東から



SD-3 Aセクション 北から



SK-1 検出状態 北西から



SK-1 セクション 南西から



SK-2 検出状態 西から



SK-3 検出状態 西から



1号窪地 検出状態 北から



1号窪地 セクション 南から

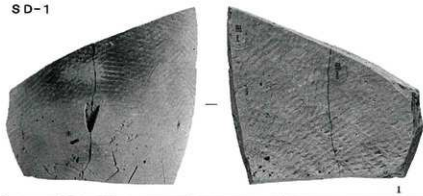


標準堆積土層 西から



調査区北西側 作業風景 南東から

SD-1



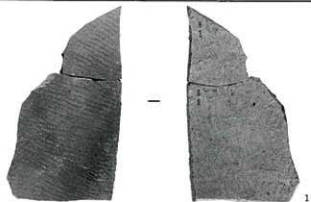
1

遺構外



1

SK-2



1



2

出土遺物

報告書抄録

フリガナ	ナスガヤホリノウチイセキ
書名	菅谷堀之内遺跡
副書名	道路築造工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第439集
編著者名	土井道昭
編集機関	有限会社 毛野考古学研究所 〒379-2146 群馬県前橋市公田町1002番地1 Tel 027-265-1804
発行機関	有限会社 毛野考古学研究所
発行年月日	西暦2019年(令和元年)9月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡	北緯	東経			
菅谷堀之内遺跡	群馬県高崎市 菅谷町字堀之内 606番2、616 番1、621番、 627番1、627 番2、628番1	102020	757	36° 22′ 39″	139° 00′ 54″	20190201 ～ 20190213	88.37㎡	道路築造

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
菅谷堀之内遺跡	集落 生産遺構	古墳	溝	3条	縄文土器	Hr-F A一次埋積層面下から人為攪拌土や溝跡が検出された。 古代の用水路とみられる溝跡2条が検出された。
		古代	土坑	3基	土師器	
		中世	ピット	4基	須恵器	
			窪地	1基		
			人為攪拌土	1面		

高崎市文化財調査報告書第439集

菅谷堀之内遺跡

—道路築造に伴う埋蔵文化財発掘調査—

令和元年9月25日印刷

令和元年9月30日発行

編集 / 有限会社 毛野考古学研究所
発行 / 有限会社 毛野考古学研究所
印刷 / 朝日印刷工業株式会社

